



●女子400メートルリレー
●女子1600メートルリレー

松田真美

(北上翔南高3年)

Scene-04
陸上競技
Track & Field

インターハイを前に、北上翔南高女子リレーチームの勢いは止まらない。その最強メンバーに、松田真美さん(3年)も六日町IIがいる。

5月22日から25日まで北上市陸上競技場で開かれた県高校総体では、第3走者で出場した400メートルリレーで48秒47、第1走者で出場した1600メートルリレーを3分55秒34でそれぞれ制し、共に昨年樹立したばかりの大会記録を更新した。さらに、6月12日から15日まで福島市のあづま陸上競技場で開かれた東北高校陸上競技大会では、1600メートルリレーの予選を3分52秒16、翌日の準決勝を3分50秒27で勝ち上がり、その翌日の決勝は3分47秒03の岩手県記録を更新して優勝。わずか3日間で5秒もタイムを短縮。松田さん自身も、準決勝で敗退した個人種目の100メートルの悔しさを晴らす快走を見せた。上位4チームまでが大会新記録のハイレベルなレースを断トツの走りで制

し、東北大会6位まで与えられるインターハイ切符を手にした。

インターハイへは、1600メートルリレーのほか、400メートルリレーでも出場する。準決勝までその組のトップタイムで通過しながら、決勝ではパトンプスのミスが出て5位。

「出だしてためらってしまったりたしのミス。大事な場面で気持ちの弱さが出てしまった」と唇をかむ。

昨シーズン前半は好調を維持。5月の県高校総体の100メートルを制すと、7月の県選手権では大学生を退け優勝。8月のインターハイは400メートルリレーの第3走者として出場したが、惜しくも準決勝で涙をのんだ。

それまで上昇気運だった松田さんを、競技人生初めての試練が襲う。インターハイ直後に行われた夏合宿で、太ももの裏側の筋肉を肉離れして戦線離脱。完治しかけていたところを、9月の新人戦県大会100メートル決勝で同じ部位の肉離れを再発させ

シーズンを終えた。「焦ることはないよ」という本正園子監督の言葉を信じ、冬季はけがの回復を見ながら地道なトレーニングを続けた。

そうして迎えた今年のシーズン。春先から徐々に調子を上げ、高校総体県大会に照準を合わせてきた。

「高校生活最後の高校総体。絶対に負けられない」と挑んだ専門種目の100メートルを誰よりも速く駆け抜け、見事な復活優勝を成し遂げた。

「全国の舞台はみんな真剣勝負。ほんの少しの気の緩みで負けてしまふ。あいさつや礼儀、勉強など、競技だけでなく普段の生活から見直し、精神的にもっと強くならなければ」とさらに気を引き締める。

インターハイ陸上競技は7月29日から8月2日まで、奈良市鴻ノ池陸上競技場で開催される。全国制覇を狙う北上翔南高の走り、そしてチームをけん引する松田さんの走りに目が離せない。

取材を終えて

自分たちの夢や目標に向かい、ひたむきな努力を重ね、この夏、全国大会に挑む生徒たちの姿を追った。

夢や目標をつかもうと、苦難や逆境にあえて立ち向かい、あきらめることなく挑み続ける姿は、高校生とは思えないほど大きく感じた。

全国高校総体や全国囲碁選手権本番まで、あと1カ月を切った。取材した生徒たちは、最後の追い込みに入っているはず。ベストコンディションで臨み、さらなる活躍の報告が舞い込んでくることを期待したい。

取材を進める中で、生徒たちを支えるたくさんの「きずな」にも出会った。

「遠野の子どもたちのためになるのなら」と快く取材に協力してくれた保護者。

離れていても、かつてのまな弟子をわが子のように見守る指導者。

生徒の努力や活躍に、そっと手を差し伸べる地域の人たち。こうしたたくさんの大人たちに囲まれている遠野の子どもたちはとても幸せだと、つくづく感じた。そして、こうした土壌には、今はまだ小さな芽がどんどん育っている。しっかり成長できるよう、地域みんなで見守りたい。

遠野には、まだまだ頑張っている人たちがたくさんいる。ひたむきに頑張る姿は、多くの人に勇気と感動を与えてくれる。遠野の誇りでもある。広報は、頑張る人をこれからも応援し続けます。特集 夏に挑む 終わり

Interview インタビュー



地道な努力が結果につながりました

北上翔南高陸上競技部監督 本正園子教諭

ハムストリングの肉離れという大きなけがから、思うように走れない日々が続く、悔しい思いをしていたはず。自分を信じ、地道な努力を続けたことが好結果に結びつきました。目標は高校新記録での優勝です。精神面などの課題を一つ一つ克服して、大会本番では持ち味の闘争心あふれる走りに期待しています。